

三光地区遺跡群発掘調査概報 I

倉迫二ツ塚古墳
諫山遺跡
倉迫平遺跡
佐知久保畑遺跡

1991・3

大分県下毛郡
三光村教育委員会

例 言

1. 本書は、三光村教育委員会が国庫と県費の補助を得て平成2年度に実施した、三光地区遺跡群発掘調査事業の調査概要である。
2. 各調査の実施に当たっては、大分県教育庁管理部文化課、中津市教育委員会、三光村建設課、土地所有者の御協力を得た。
3. 調査は県文化課指導のもと、諫山遺跡A地区を染矢和徳が、その他を村上久和、植田由美が行った。
4. また、現地では調査指導員のほかに小田富士雄（福岡大学教授）、和田晴吾（立命館大学教授）、武末純一（北九州市立考古博物館副館長）、大分県文化課諸氏のご指導、ご助言を得た。
5. 本書の執筆は各調査員で分担し、その編集を村上、植田がおこなった。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 調査の概要	
1. 倉迫二ツ塚古墳	3
2. 諫山遺跡A地区	6
3. 倉迫平遺跡	9
4. 上深水浪立地区	11
5. 佐知久保畑遺跡	12
第3章 まとめ	15

挿 図 目 次

第1図 三光村内遺跡分布図	2
第2図 倉迫二ツ塚古墳位置図	3
第3図 倉迫二ツ塚古墳群墳丘測量図	5
第4図 諫山遺跡A地区位置図	6
第5図 諫山A地区遺構配置図	7
第6図 諫山遺跡出土土器実測図	8
第7図 倉迫平遺跡位置図	9
第8図 倉迫平遺跡発掘トレンチ位置図	9
第9図 上深水浪立地区位置図	11
第10図 上深水浪立地区発掘トレンチ位置図	11
第11図 佐知久保畑遺跡位置図	12
第12図 佐知久保畑遺跡遺構配置図	13

第1章 はじめに

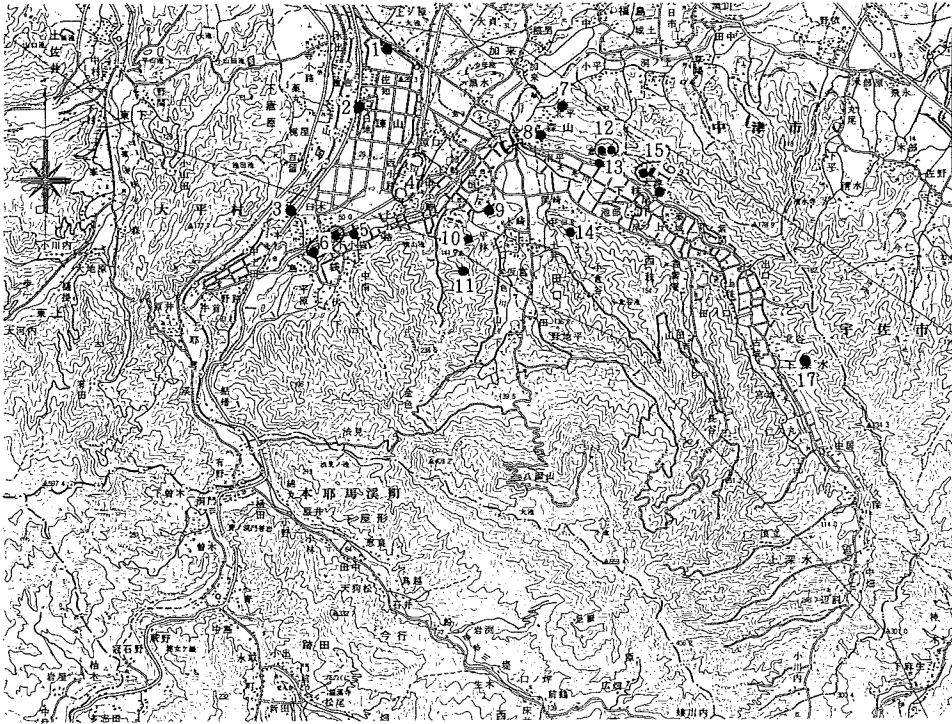
三光村は大分県の北端にあって、村の北側には福岡県との境となる一級河川山国川が流れ周防灘へ注いでいる。村の南側には、標高659mの八面山がひかえ中津平野に向かって幾つかの低い丘陵を形成し、またその裾部は開析谷によって開けている。村内には昭和56年より調査が行われた上ノ原横穴墓群をはじめとして多くの遺跡が存在するが、これらの遺跡のほとんどはこの低位丘陵と開析谷によって形成された平野部の位置に点在している。

本年度は工場誘致に伴う倉迫二ツ塚古墳、倉迫平遺跡の試掘調査、農協倉庫建設に伴う諫山遺跡の試掘調査、圃場整備事業に伴う上深水浪立地区の試掘調査、企業誘致に伴う佐知久保畑遺跡の試掘調査をそれぞれ実施した。

調査団の構成は下記のとおりである。

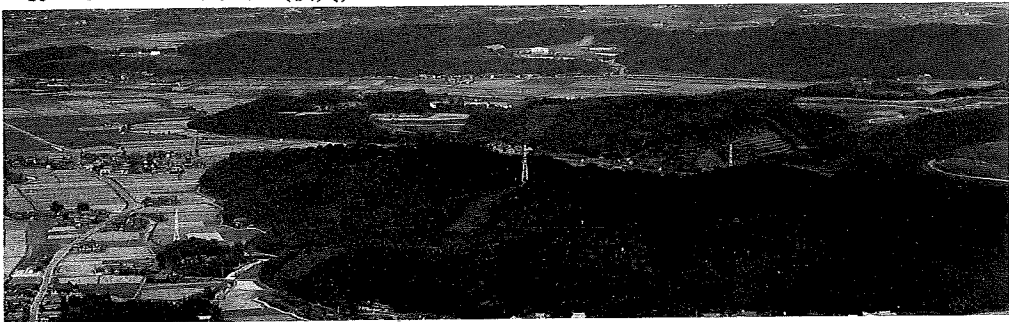
調査団の構成

調査主体者	三光村教育委員会
調査責任者	松田一臣（三光村教育長）
調査委員	賀川光夫（別府大学教授） 西谷 正（九州大学教授） 後藤宗俊（別府大学教授）
調査員	清水宗昭（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第一係長） 村上久和（ ” 第二係主査） 染矢和徳（ ” 嘱託） 植田由美（三光村教育委員会嘱託）
事務局	平田二男（三光村教育委員会次長） 萩原圭介（同社会教育係）
発掘作業員	井掘勝美・中野光男・南金山猛・長谷川勇・長谷川俊夫・長谷川正則 藤野武志・松久公・井掘桂子・井掘波子・上永紀代子・川野ヨソ子 釘丸雪子・楠木タカ子・酒井キヨノ・相良スナミ・相良トメ・相良ノブ子 相良ヒデ子・佐々木貞子・清城君子・清城玉美・高畑キヨカ・長谷川秋子 長谷川勝子・長谷川花子・黒川洋美・黒川みゆき・杉本文代・徳永賀子 古島正子・湯口一子
整理作業員	土橋厚子・乙咩里美



第1図 三光村内遺跡分布図 (1/50,000)

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 上ノ原横穴群 (横穴) | 11. 鴨山横穴群 (横穴) |
| 2. 佐知遺跡 (集落跡・散布地) | 12. 倉迫二ツ塚古墳 (古墳) |
| 3. 城横穴群 (横穴) | 13. 野辺田横穴群 (横穴) |
| 4. 諫山遺跡群 (散布地) | 14. 岡崎城跡 (城跡) |
| 5. 臼木遺跡 (散布地) | 15. 三ツ塚古墳 (古墳) |
| 6. 臼木古墳群 (古墳) | 16. 天神原横穴群 (横穴) |
| 7. 北平横穴群 (横穴) | 17. ズリヤネ城跡 (城跡) |
| 8. 洗添横穴群 (横穴) | |
| 9. 成恒城跡 (城跡) | |
| 10. 庵ノ尾横穴群 (横穴) | |



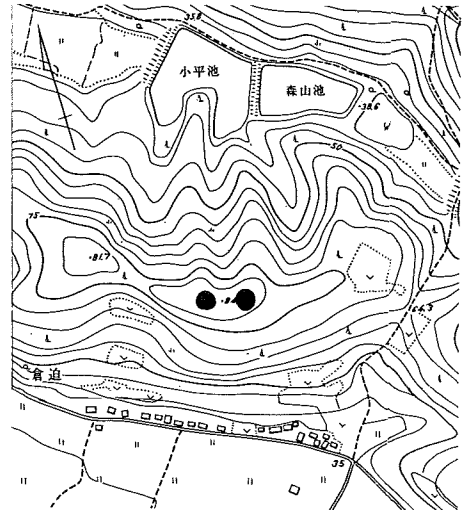
二ツ塚古墳・倉迫平遺跡遠景

第2章 調査の概要

1. 倉迫ニツ塚古墳

遺跡の位置

倉迫ニツ塚古墳は、大分県下毛郡三光村大字倉迫字ニツ塚に所在する。この遺跡は犬丸川を見下ろす高台にあり、南側には八面山を、遠くには周防灘を望むことが出来る。ニツ塚古墳は周知遺跡として二基の古墳が存在することは既に知られていた。この遺跡が立地する低位丘陵上は、また多くの古墳、横穴墓群が存在することでも知られている。村内の古墳、横穴墓群はその立地場所が大きく四つに分けられる。1.上ノ原横穴墓群をはじめとした中津平野南端の山国川流域、2.臼木古墳群をはじめとした下毛原丘陵上、3.倉迫ニツ塚



第2図 倉迫ニツ塚古墳位置図(1/10,000)

古墳、三ツ塚古墳群、洗添横穴墓、野辺田横穴墓群、天神原横穴墓群をはじめとした犬丸川流域の低位丘陵上、4.庵ノ尾・鴨山横穴墓群をはじめとした通称「鴨山」と呼ばれている成恒から諫山にかけての丘陵である。村内には多くの横穴墓が存在するが、なかでも上ノ原横穴墓群は今までに約80基が発掘されており、その大半が未掘であったため、葬送儀礼や出土した人骨から家族構成など多くの問題を提起している。(植田)



ニツ塚古墳遠景 I

調査の概要

倉迫二ツ塚古墳は、標高約82mの丘陵頂部とやや斜面よりの部分に構築されており、西側に位置する古墳から1号墳、2号墳と称した。1号墳、2号墳とも、現状では天井石が取り除かれている以外は比較的保存状態は良好であった。

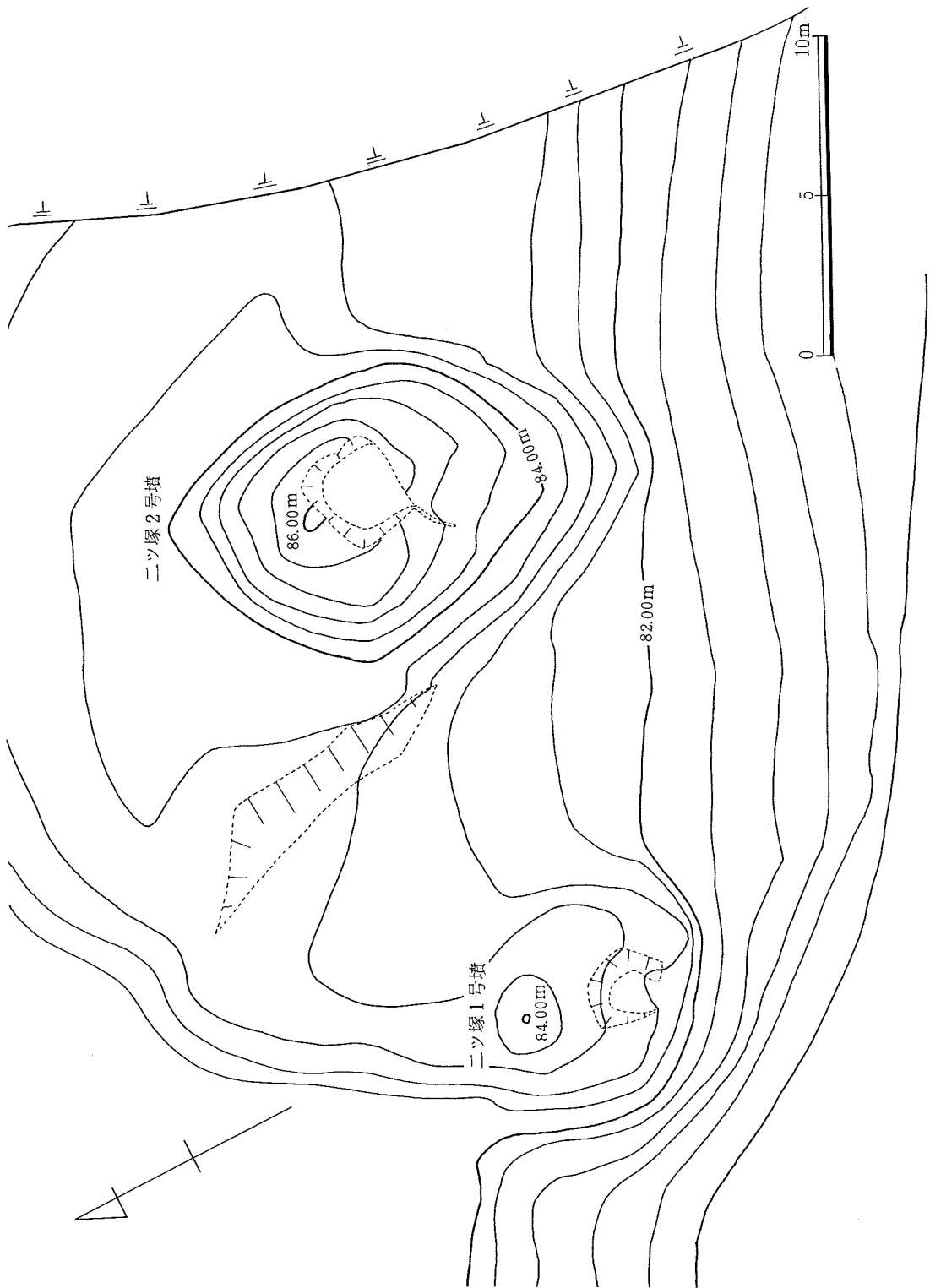
1号墳は天井石が全て取り除かれていたため、玄室に大量の土が入り込んでいた。しかし一部では若干石室の石が部分的に露出していた。墳丘南側と東側は多少削平を受けていたが、直径約9m前後、高さ約3m前後と推定される。墳丘は斜面を利用したため、北側が高低差がなく、南側に向かう程高低差が出来る。この現状から主体部は南側に開口する横穴式石室と想定される。葺石、外護列石等の施設は現状では認められなかった。2号墳も天井石は奥壁ぎわ以外は全て取り除かれていたため、玄室に大量の土が入り込んでいた。石室の一部が露出しており、その状況から羨道部が南側につく横穴式石室と想定出来る。古墳の大きさは直径15m、高さ4mであるが、丘陵頂部に立地しているため、墳丘規模が大きく見える。

地形測量と平行してトレンチによる墳丘裾部と、周溝の確認を行った。トレンチは合計5本設定して行った。第1トレンチから第4トレンチまでは周溝の確認が出来なかったが、第5トレンチについては、1号、2号を区画する溝と思われる遺構を確認出来た。

倉迫二ツ塚古墳は、丘陵の頂に位置するという立地条件から周溝の必要性がほとんどなく、そのため1号墳と2号墳の間にも溝を造ったと思われる。(植田)



二ツ塚古墳遠景 II

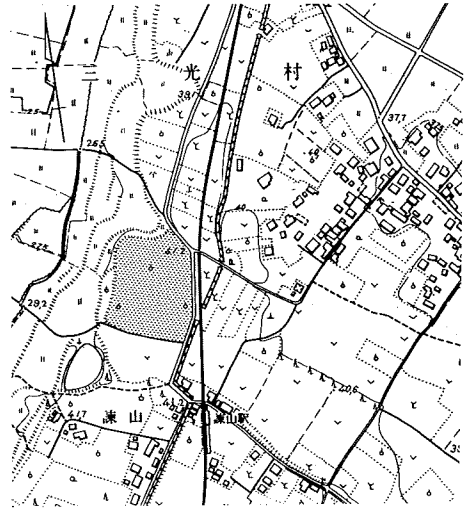


第3図 倉迫ニッ塚古墳群墳丘測量図

2. 諫山遺跡A地区

遺跡の位置

諫山遺跡A地区は、大分県下毛郡三光村大字諫山に位置する。この遺跡は「下毛原丘陵」という洪積世台地上に所在し、この丘陵上には多くの遺跡がある。なかでも畑地帯は土器の散布範囲も広く、縄文・弥生・古墳・古代・中世等各時代の大規模な集落があったことを思わせる。昭和52年に行われた耶馬溪道路の拡幅工事では、石蓋土墳墓とともに多量の弥生式土器が出土しており、特に弥生後期後半～末にかけて、遺跡が増大していく傾向が認められる。



第4図 諫山遺跡A地区位置図(1/10,000)

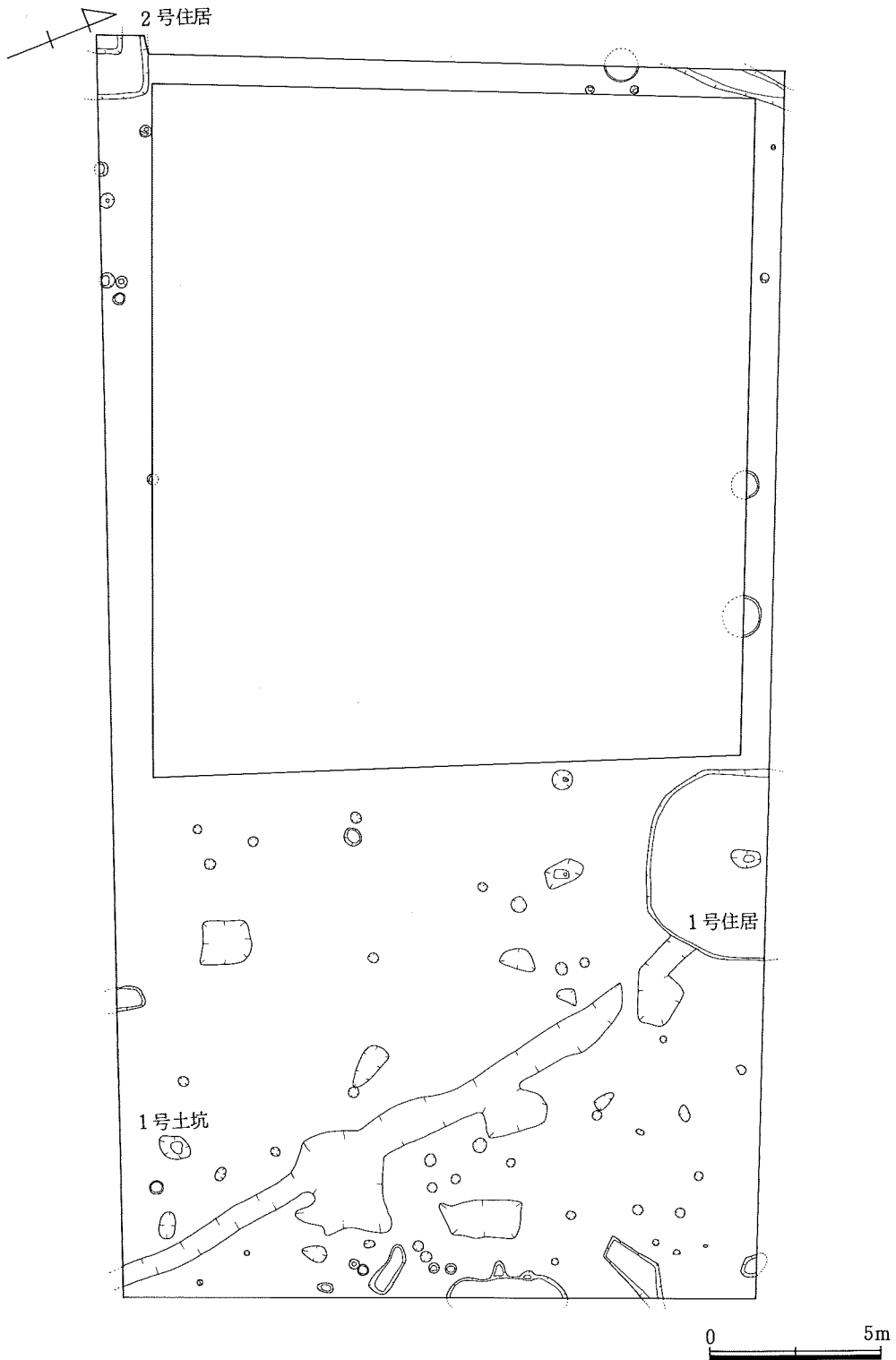
調査の概要

遺跡は山国川東岸中流域、八面山北麓に形成された扇状地の末端部標高約30mの地点に位置する。遺跡西側は河川の浸食作用によって段丘状地形を形成し、山国川に向かって大きく落ち込んでいる。調査区は開墾された畑地のため若干の削平を受けていたが、弥生時代中期の遺物が出土した。遺構としては、住居跡2軒、土坑30基、溝状遺構2条、不明遺構39基を検出した。

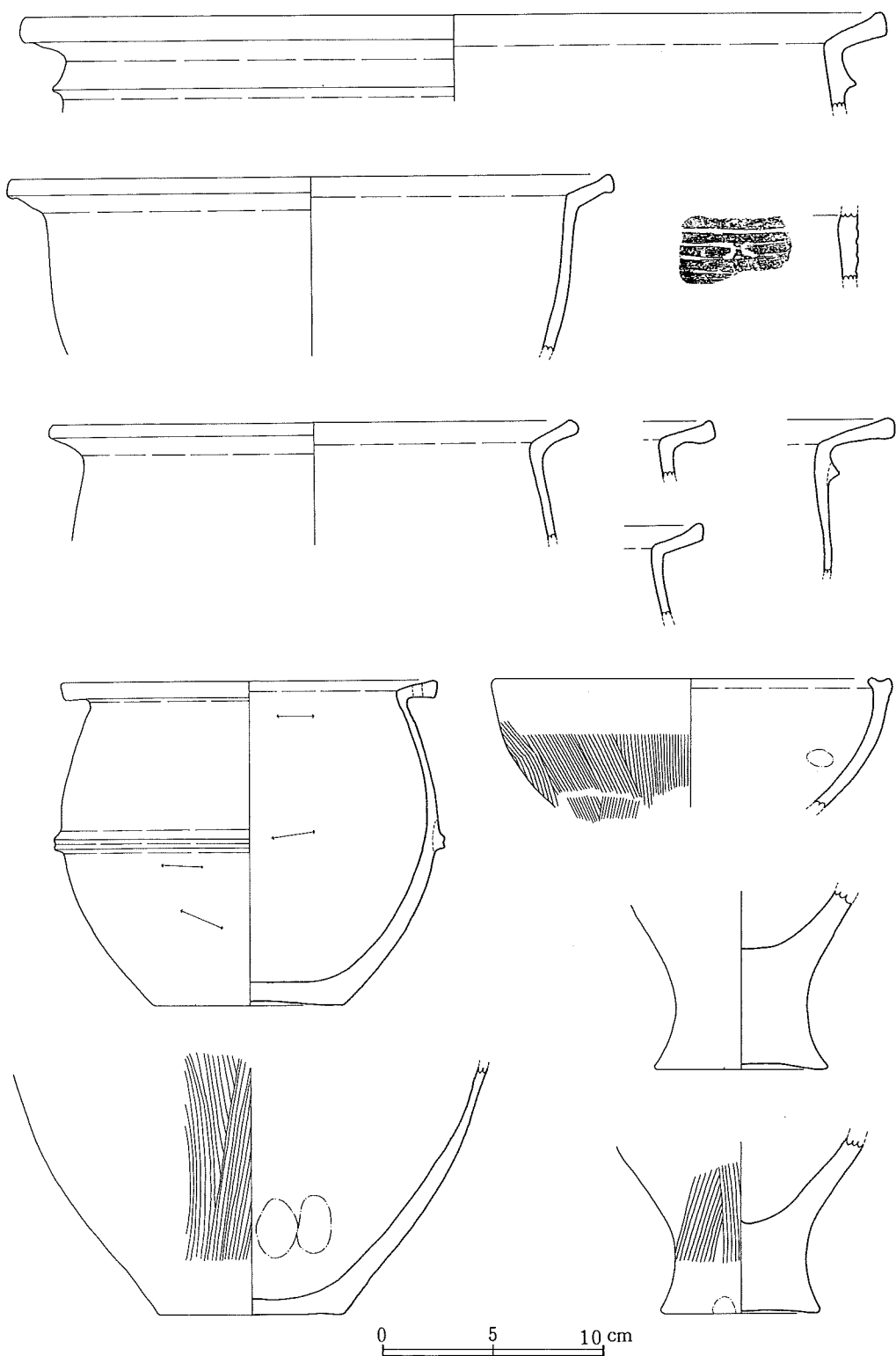
円形住居跡(1号住居)：弥生時代中期後半の住居跡と考えられる。直径は約5.5mを測り、ほぼ円形を示す。内部構造は調査区が変則的であったため主柱穴の検出に至らなかったが、張り床面、中央には炉の掘り方を確認した。また住居壁面南側に住居跡に切られた長さ約2.5m、幅約0.15m、深さ約0.05mの不定型土坑を検出した。なお、住居跡床面からは、壺型土器片・甕型土器片・石皿が出土した。

土坑(1号土坑)：弥生時代中期後半の土坑である。掘り方は長軸約0.9m、短軸約0.65mの円形に近い楕円形を呈する。深さは約0.3mを測り、すり鉢状になっている。遺物は黒色の埋土の中からまんべんなく折り重なるように壺型土器・甕型土器が投棄された状態で出土した。出土状態から廃棄されたものとも考えられるが、精製土器も含まれていることから今後の検討が必要である。

まとめ：今回の調査は試掘調査のため、主に遺構の検出にとどまり、完掘したものは少なかった。しかし、1号土坑からは弥生時代中期後半の土器を多数検出した。これは、豊前南部地域の土器相の一端を特徴づける好例である。さらに、弥生時代中期の集落の存在することが判明し、この遺跡が弥生時代の中心村落の一つである可能性が大きくなった。(染矢)



第5図 諫山A地区遺構配置図 (1/200)



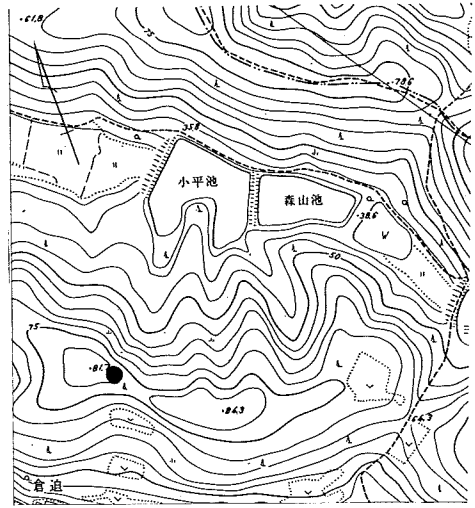
第6图 諫山遺跡A地区1号土坑出土土器实例图(1/3)

3. 倉迫平遺跡

遺跡の位置

倉迫平遺跡は、大分県下毛郡三光村大字倉迫字倉迫平に所在する。この遺跡のすぐとなりには倉迫二ツ塚古墳があり、倉迫平遺跡は標高83mを測る。

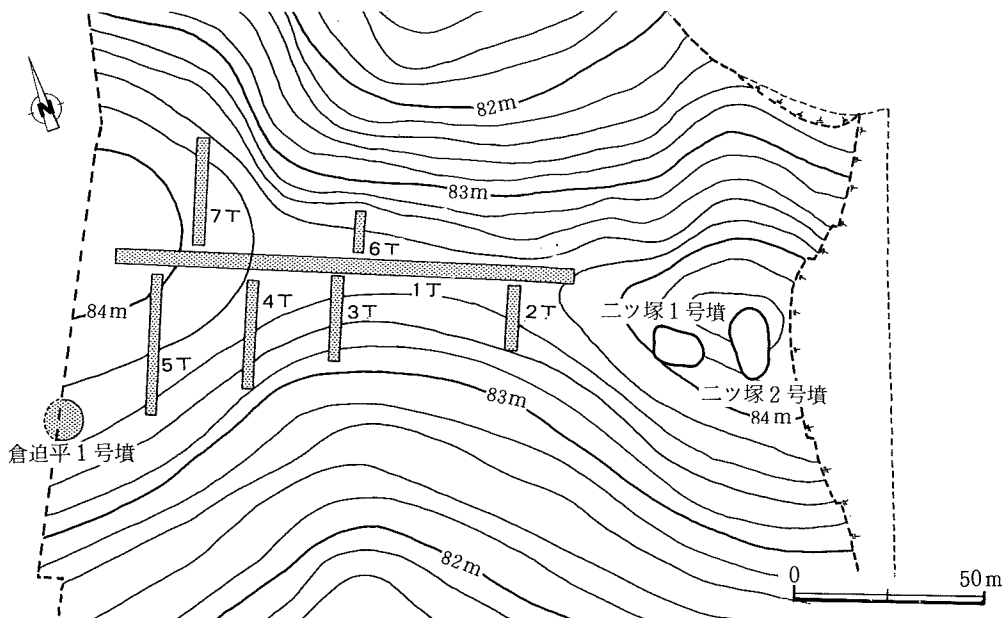
本遺跡は八面山から周防灘に向かって延びる低丘陵上に位置している。谷を隔てて北側の丘陵先端部分には、昭和62年度の北大道路建設の際、調査が行われた森山遺跡がある。この遺跡は標高60mを測り、弥生時代前期末から中期にかけての住居跡・貯蔵穴・石蓋土壙墓・小児用カメ棺・土壙墓などを検出した。



第7図 倉迫平遺跡位置図(1/10,000)

調査の概要

遺跡は東西に延びる低丘陵上にそって所在している。調査は7本のトレンチを設定して行い、貯蔵穴2基、不定形土坑10基を検出し、弥生時代中期の遺物を出土した。不定形土坑については、木の根による攪乱が激しく遺構の大きさ、形がはっきりしない。また調査区の西端で6世紀末～7世紀初頭の主体部に横穴式石室をもつ古墳を1基発見した。(植田)



第8図 倉迫平遺跡発掘トレンチ位置図(1/200)

貯蔵穴（SK-1）：弥生時代中期の遺構で、大きさは東西、南北とも1.5m、深さ0.9mである。口に比べて中が広がる袋状土坑をなしている。遺物は、土器片が数点出土したのみである。

不定形土坑（SK-4）：木の根による攪乱で大きさがはっきりしないが、磨製石斧を1点出土している。石斧の大きさは、10cm×6cm厚み4cmである。

倉迫平1号墳：標高83mの所にあるこの古墳は、トレンチによる調査中、偶然に発見したもので、確認するために周辺全体を広げ全体の規模等を把握した。

墳丘はわずか50cmのみ残っており、天井石はすでに取り除かれていた。石室は、露出している。この古墳は地山を掘り込んで石室墓壇を作り、それに石室を構築している。石室上部から出土した土器によって6世紀末～7世紀初頭の古墳であることがわかる。また古墳の周りには周溝があり、馬蹄形状にめぐると思われる。周溝の中からは、完形の提瓶、須恵器片、土師器片が出土している。なお、石室上部より糸切りの土師器皿が出土しており、中世(13～14世紀)に再利用した可能性が大きい。(植田)



倉迫平1号墳検出状態



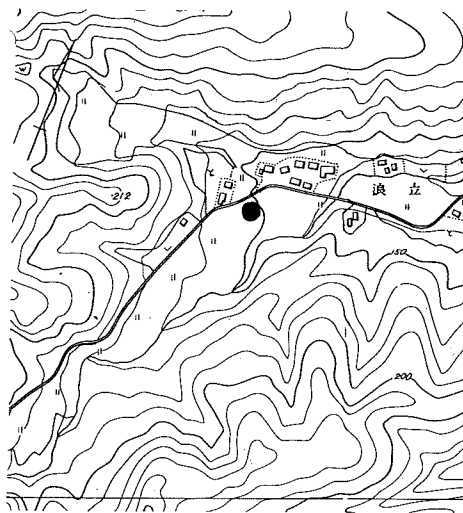
弥生貯蔵穴完掘状態

4. 上深水浪立地区

調査の位置

調査区は、大分県下毛郡三光村大字上深水字浪立に所在する。

上深水浪立地区は、周囲を山に囲まれた小さな集落で、調査区の西側には八面山が、東側には犬丸川によって形成された通称「北谷」と呼ばれる谷がある。周辺には長谷寺があり、県指定有形文化財の「銅造観音菩薩立像」がある。これは長谷寺の秘仏で九州最古の飛鳥仏といわれ、総高39.4cm、重さ7.5kgである。また室町時代から桃山時代に造立された、村指定有形文化財の「長谷寺国東塔」がある。

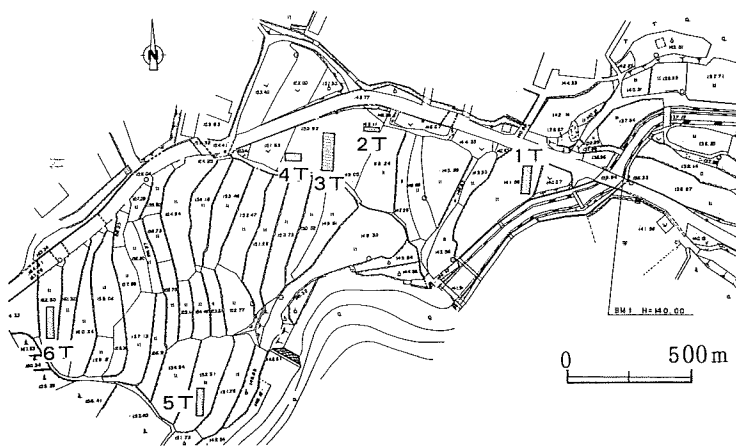


第9図 上深水浪立地区位置図
(1/10,000)

調査の概要

圃場整備事業に伴う事前調査として、合計6本のトレンチを設定し遺構確認調査を行ったが、遺物・遺構とも確認されなかった。地区の人から、以前道路を整備した際に田の石垣から五輪塔が発見されたとの話があり石垣についても調査を行ったが、土で埋まっている部分が多く現状では確認出来なかった。露出している部分について、塔は発見できなかった。

この辺りには五輪塔がいくつか建っており、道路を整備した際に発見された五輪塔は、塔が倒れた等の際に石垣に転用したものである。(植田)



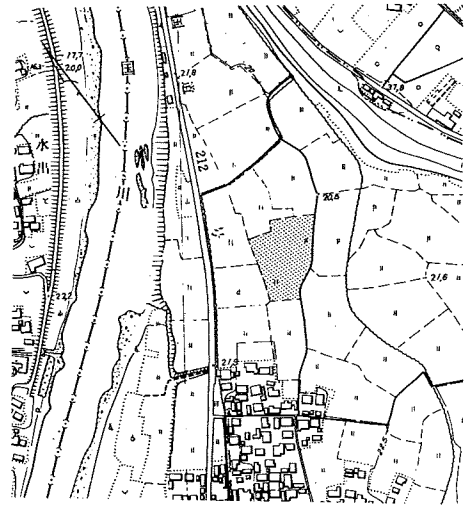
第10図 上深水浪立地区発掘トレンチ位置図 (1/3,000)

5. 佐知久保畑遺跡

遺跡の位置

佐知久保畑遺跡は、大分県下毛郡三光村大字佐知字久保畑にある。

この遺跡は山国川東岸に形成された河岸段丘上にあり、標高約20mを測る。この周辺には平成元年度調査に、佐知バイパス建設に伴って発掘調査が行われた佐知遺跡がある。この遺跡では縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が出土している。



第11図 佐知久保畑遺跡位置図
(1/1,000)

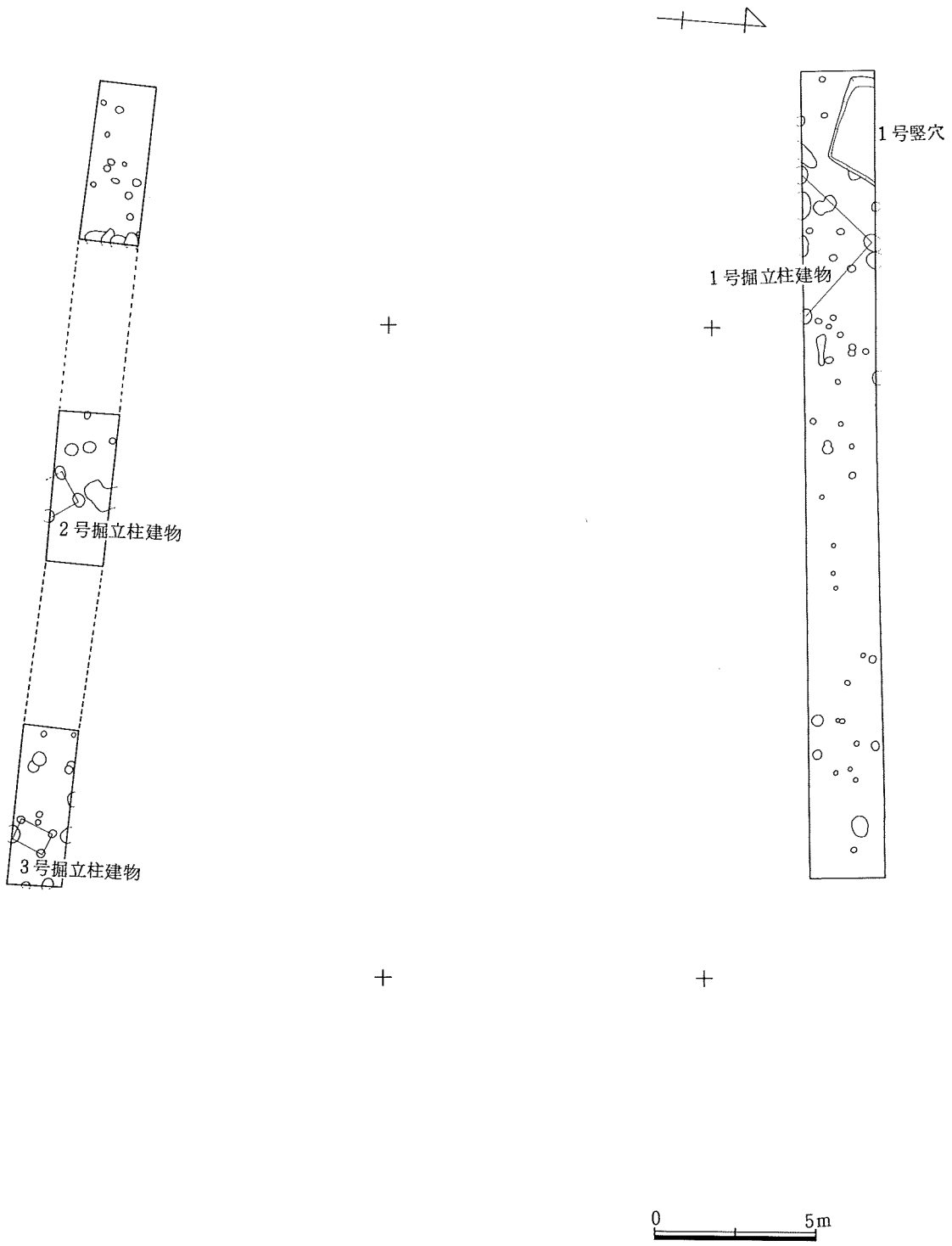
調査の概要

今年度は第1回目の試掘調査として合計4本のトレンチを設定して調査を行った。第1トレンチ、第2トレンチは圃場整備事業が行われておらず、よく旧地形が残っている微高地に設定した。

遺構は表土より約30cmから約1m程下にあり、保存状態は極めて良好である。掘立柱建物3棟、住居跡1軒、ピット70基を検出した。第3トレンチ、第4トレンチを設定した地点は、すでに圃場整備事業が行われ旧地形をとどめてなかったが、調査の結果谷状になっていた。この両トレンチでは遺構の確認はできなかった。しかしながら、圃場整備時の埋土が約1mから1.5m程旧地形の上に堆積しており、他の地点では、遺構が確認される可能性はある。(植田)

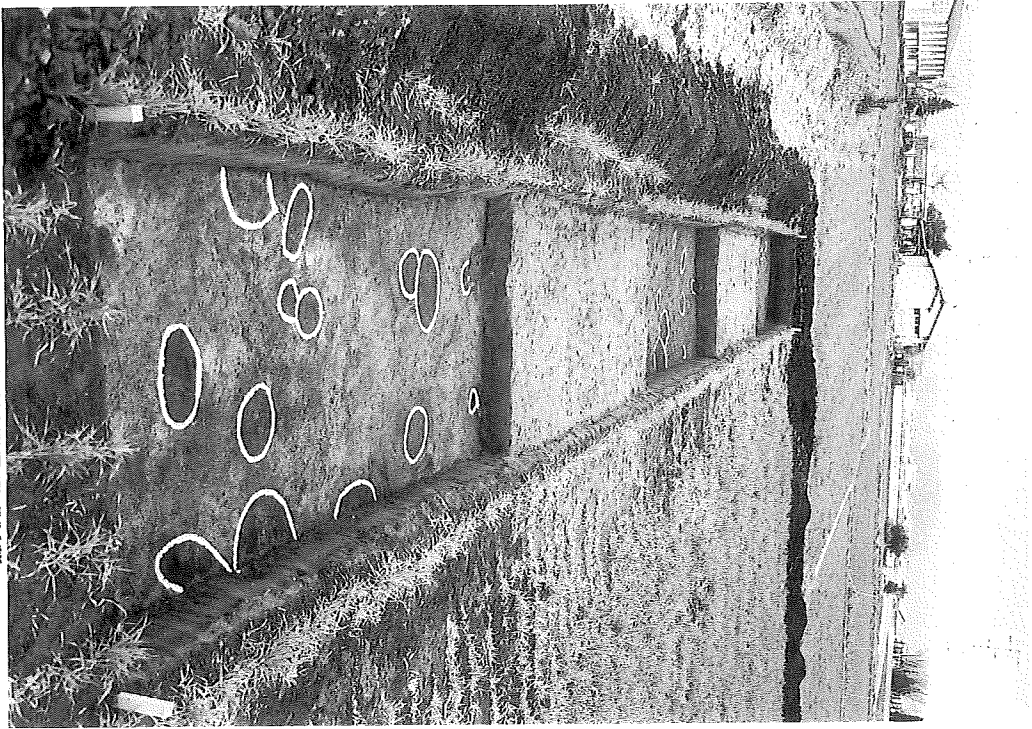
調査日程は、下記のとおりである。

- 2月6日(水)……第1トレンチ、第2トレンチ設定、発掘(25m×2m)
- 7日(木)……第1トレンチ、第2トレンチ発掘(2T、pit検出)
- 8日(金)……第1トレンチ、第2トレンチ発掘(1T、pit検出)
- 12日(火)……第1トレンチ、第2トレンチ発掘、第3トレンチ設定(3m×3m)
- 13日(水)……第1トレンチ、第2トレンチ発掘
- 18日(月)……第1トレンチ発掘、平板による実測(1/50)
- 19日(火)……第1トレンチ発掘
- 20日(水)……第3トレンチ発掘
- 21日(木)……第4トレンチ設定、発掘(30m×2m)
- 22日(金)……第4トレンチ発掘



第12図 佐知久保畑遺跡遺構配置図 (1/200)

佐知久保畑遺跡掘立柱建物検出状態



同調査風景



第3章 ま と め

本年度、三光地区の調査は、企業の誘致指定地、大型倉庫建設予定地、圃場整備予定地についての遺跡確認調査を行った。

倉迫古墳群・倉迫平遺跡は、工場進出に伴う試掘調査である。この内、倉迫古墳群については、広瀬幸吉氏による報告があり、その存在は知られていたが規模、主体部、時期等は不明であった。^{註(1)} 今回の試掘調査により1号墳は径9m・高さ3m、2号墳が径15m・高さ4mの盛土のみで築造された円墳で、ともに主体部は巨石を使用した横穴式石室で天井石はほとんどが抜き取られている状態であることが明らかになった。倉迫平遺跡は、周知遺跡ではなかったが森林伐採後丘陵頂部が平坦であるところから弥生時代の遺跡がある可能性がでたため、試掘を行うことになった。その結果、横穴式石室一基と弥生時代の土坑等を検出し、この丘陵全体に遺跡が広がることが判明した。

さて、ここで三光地区の古墳文化を概観して見よう。前述したように三光地区の古墳は諫山石棺群、上ノ原墳墓群を中心とする山国川流域グループ、臼木古墳群、鴨山横穴墓群を中心とする田口・小袋グループ、岡崎墳墓群・倉迫二ツ塚・三ツ塚古墳等を中心とする犬丸川グループに分けられる。これらグループの形成は、それぞれ眼下に広がる水田地帯の生産力と深く関わっているものと想定される。これらの遺跡のうち最も早く出現するのが倉迫古墳群と対峙した丘陵上にあり、弥生時代終末～古墳時代前半と考えられる岡崎墳墓群である。この遺跡は、一基の箱式石棺と二十基の石蓋土壙墓が群集し一墳墓群を形成する。^{註(2)} ここでは、鉤・鉄斧を副葬した石棺墓と副葬遺物を全く持たない石蓋土壙墓群という差は認められるが、石棺墓の周辺には溝等区画する施設はない。有力個人は認められるがまだ集団内に留まった状態の墳墓例である。山国川グループの諫山墳墓群も同様なものと考えられるが正式調査はなく今後の課題であらう。

次に、5世紀初頭～後半になると山国川グループの上ノ原墳墓群が出現する。この遺跡は、5世紀初頭前後の勘助野地1号方形低塚墳→5世紀中頃前後の幣旗邸2号方形低塚墳→5世紀後半前後の幣旗邸1号円墳→6世紀後半前後の相原1・2号墳の墳墓群と5世紀後半～8世紀前半まで築造、追葬が行われる上ノ原横穴墓群で構成され、ともに鉄刀・馬具類を持つ墳墓があることなどから山国川中・下流域の盟主墳を含む墳墓群であらう。なお、上ノ原横穴墓群に埋葬された人々の集落の一つが佐知遺跡であることを近年の発掘調査で確認した。

6世紀後半になると田口・小袋グループの臼木古墳群、犬丸川グループの倉迫二ツ塚、同三ツ塚古墳群とそれを取りまくように形成された横穴墓群が出現する。これらの古墳は、10～20mの墳丘を有し、主体部に横穴式石室を持つものである。この時期になり小袋・犬丸川グループがかなり有力な集団に成長することが理解できる。このような下地の上に8世紀後半～9世

紀初頭に出現する塔ノ熊廃寺があるのであろうか。今後、集落遺跡を含めたこの地域の古墳文化の解明が望まれる。

倉迫平遺跡では弥生時代中期の土坑を多数検出し、この丘陵上に同時期の集落跡のあることが判明した。今後、谷を隔てて同様な丘陵上に立地する森山遺跡や犬丸川の自然堤防上に立地する樋多田遺跡などとの対比が注目される。さらに丘陵は西に延びており、その取り扱いに十分な検討が必要となろう。

諫山遺跡A地区は、農協倉庫建設予定地の事前調査である。調査は遺構確認を中心に行ったが、一部土器等の多数出土した遺構については完掘した。発掘した遺構は、弥生時代中期後半前後のものである。諫山遺跡は、今まで弥生時代後期後半～終末を中心とする大規模遺跡と考えられていたが今回の調査で中期にも遺跡が展開することが判明した。さらに1号土坑出土の土器は、須玖Ⅱ式並行期の豊前南部地方の土器相を示す重要な資料となる。この諫山遺跡は、約5haに広がり山国川流域の弥生時代遺跡としては最も大規模なものである。近年この付近も宅地化が激しく進んでおり、今後、遺跡の規模、性格等を確認する作業が急務となるであろう。

上深水地区の本年度の圃場整備事業対象区では、遺構等は検出されなかった。しかしながら、この地区には九州西国一番札所である長谷寺等の修験系統の遺跡が散在しており、八面山を中心とするこの種の遺跡の調査も今後重要な課題となってくる。

佐知久保畑遺跡では、6世紀後半～7世紀前半の竪穴住居1棟と掘立柱建物を数棟検出した。この遺跡は佐知遺跡の集落地東北端の部分であり、この部分に倉庫を含む掘立柱建物が存在することは佐知遺跡における古墳時代集落の構造を解明する上でその意義は大きい。今後、遺跡の範囲、水田等の生産遺跡との関連などの実態究明に総合的な調査を継続していかなければならないであろう。

以上、本年度三光地区においては、5ヶ所の試掘調査を実施した。いずれも開発予定地の試掘調査であり、1ヶ所を除き全て遺構を検出した。三光地区においては今日まで大規模な開発は少なく遺跡も良好な状態で残っている。しかしながら、北大道路開通を前後して都市化の波が徐々に押し寄せている。今後は、開発部局、開発業者との十分な協議を行うとともに遺跡の範囲、性格等の綿密な確認作業を行っていく必要があるであろう。(村上)

註(1) 広瀬幸吉 「下毛郡古墳横穴一覧表」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告』五、1927年

(2) 昭和59年大分県教育委員会調査。報告書近刊予定

(3) 『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(I)』大分県教育委員会 1988年

(4) 『幣旗邸古墳』中津市教育委員会 1984年

(5) 平成元年中津市教育委員会調査。報告書近刊予定

(6) 賀川光夫「相原古墳」『中津市史』中津市史刊行会 1965年

(7) 『佐知遺跡』大分県教育委員会 1989年

三光地区遺跡群発掘調査概報 I

1991年3月25日

発行：下毛郡三光村教育委員会

下毛郡三光村大字原口

印刷：魚瀬印刷
